

J-POP の歌詞における二重表記の用法
—1989 年頃から 2019 年までの 30 年間に—

胡 佳芮 (一橋大学大学院生)

1. はじめに

日本語は正書法がない言語だと言われる(佐竹, 1980)。多種多様な表記形式が可能である中、意味(語義)を表示する「主表記」と読み方(語形)を限定する「副表記」の両方によって構成される「二重表記」がある(泉, 1993)。例えば、J-POP の歌詞において、下記のような二重表記の例がよく見られる。

1. 無邪気な季節(とき)を過ぎ (GLAY「ここではない、どこかへ」、TAKURO 作詞, 1999)
2. この今(とき)を生きる (柴咲コウ「かたちあるもの」、柴咲コウ・山本成美作詞, 2004)
3. 物憂げな季節(シーズン) (家入レオ「春風」、SoichiroK 作詞, 2018)

例 1.～例 3.にある下線部について、泉(1993)は「季節」や「今」のように本来の文字列内にあるものとして語の意味(語義)を示す部分は「主表記」と、その直後の「とき」や「シーズン」のように主表記に添えて傍記や注記の形で読み方(語形)を括弧の中に示す部分は「副表記」とされ、主表記と副表記の両方を組み合わせて「二重表記」であることが指摘している。

このように、歌詞における二重表記は一つの語に対して複数の表記形の選択肢の中からどれを選ぶかという作詞者の意志をより確実に表示する。新聞などの媒体と異なり、歌詞に用いられる文字表記に関しては明確な基準がなく、作詞者による独自の用字法もあり得るため、表記の自由度がかなり高いと予想されるが、J-POP の歌詞における二重表記に焦点を当てる研究はまだ十分とは言えない。そこで、本研究は J-POP の歌詞に出現している二重表記の用法を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

二重表記に関する研究として、短歌における二重表記を考察した泉(1993)、清水(2020)がある。泉(1993)は 1991 年、1992 年の朝日新聞に掲載された短歌・俳句における二重表記の使用文字や主表記と副表記の関係を調査し、「拘束性、必然性をもった二重表記」と「恣意的な運用としての二重表記」があると指摘している。また、清水(2020)は 2013～2019 年に刊行された現代短歌の歌集における二重表記の役割を調査し、後述の今野(2009)の分類を参考にして「読みとしての二重表記」と「表現としての二重表記」という分類を提案した。

また、短歌以外のジャンルにおける二重表記に関連する研究としては、明治以降の文学作品における振り仮名を考察した岩淵(1988)、ルビの必要性和創造性を指摘した石黒(2005)、振り仮名を「読みとしての振り仮名」と「表現としての振り仮名」の 2 種類に分けた今野(2009)、漫画雑誌における当て字に「口語や外来語の読みを示す」、「スポーツ用語」など 7 種の使い方がありと分析した白勢(2012)などが挙げられる。

このように、小説、短歌、漫画などに見られる二重表記の役割や機能に関する研究が多く行われている。一方、J-POP の歌詞における二重表記に関する研究として、鈴木・山口(2000)、山田(2018)などが挙げられるが、これらは「漢字とルビの組み合わせ」や「当て字」の観点からの分析である。また、鈴木・山口(2000)は 2000 年代以前の歌詞を対象とした点と、山田(2018)は特定のアーティストの作品に絞った点から見ると、J-POP という概念が誕生してから現在にいたるまでの二重表記の使用実態が俯瞰できるような考察は少ない。

そこで、本研究では、清水(2020)による二重表記の分類方法を参考にし、短歌や漫画などとは異なる、J-POP の歌詞だけに見られる二重表記の特徴を捉えるため、新たな分類方法を設定し、提案する。

3. 調査内容

3.1 本研究における二重表記の定義

本研究では、泉(1993)の定義に基づき、J-POP の歌詞に出現している「季節(とき)」のように、その語の読み方を括弧の中に示すものの中から、下記の条件(A)および条件(B)のいずれれ

も満たす表記形式を歌詞における二重表記とする。

条件(A):主表記にあたるものを「常用漢字表」と「大辞林」で調べると、副表記にあたる読み方が存在しない。

条件(B):副表記にあたるものを「常用漢字表」と「大辞林」で調べると、主表記にあたる表記形が存在しない。

例えば、上記の例1.「季節(とき)」は、「季節」を「常用漢字表」と「大辞林」で調べると、「とき」という読み方が掲載されていない。それと同時に、「とき」を「常用漢字表」と「大辞林」で調べると、「季節」という表記形が掲載されていない。したがって、「季節(とき)」は二重表記とされる。なお、歌詞は歌うことを目的にするため、その語の語義と語形の両方を同等に注視する必要があると考えられ、ここで用いている「主」と「副」は、分析にあたって「主表記」と「副表記」の2つの部分に分けるための呼び方であり、どちらかが中心あるいはどちらかが付随であるという意味ではない。

3.2 調査資料の概要

1988年に誕生した「J-POP」という言葉は、元々洋楽と肩を並べられるような邦楽のことを指していた(烏賀陽, 2005)。本研究では、1989年頃以降に、日本国内で発売された主流音楽のうち、日本の伝統的な要素が多く含まれる「演歌」とはっきり区別できる日本のポピュラー音楽を「J-POP」とする。また、J-POP時代における二重表記の用法を考察するため、1989～2019年までの約30年を5年ごとに区切り、各区切りの最初の年である1989年、1994年、1999年、2004年、2009年、2014年、2019年の7つの年を調査期間として選定する。そして、この7つの年において、各年度オリコン年間CDシングル売り上げランキング100位以内の作品から、J-POPとみなされる楽曲の歌詞を調査した。歌詞検索サイト「歌ネット」の情報を参照して調査した結果、総計800曲のうち、158曲の歌詞に二重表記が使用されていることを確認し、これら158曲の歌詞から延べ345例の二重表記を収集した。

4. 調査結果と分析

4.1 本研究における二重表記の分類

図1に示すように、主表記と副表記である語がそれぞれ指している意味はどのような関係に当てはまるかをもとに、網掛けで示した9つの分類項目を設定した。この分類に基づき、集計した結果を表1にまとめる。なお、各分類の詳しい説明については、4.2を参照のこと。

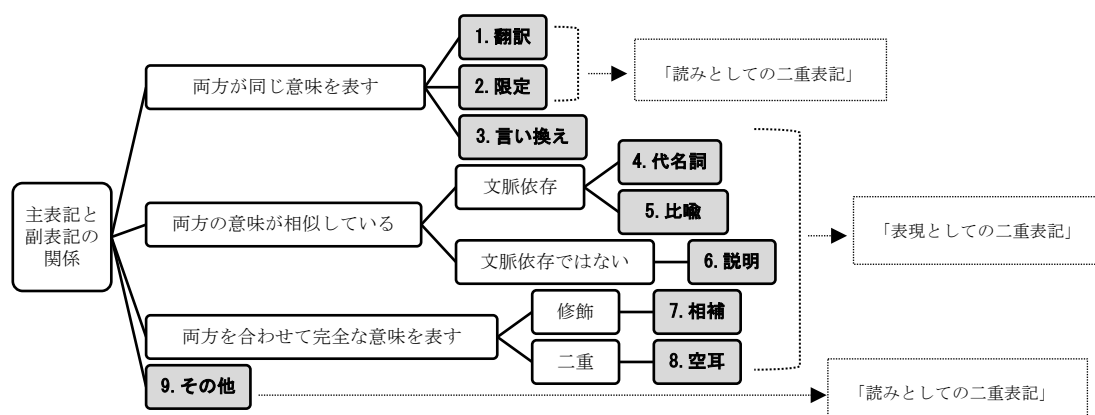


図1 二重表記の分類基準

清水(2020)の調査結果によれば、現代短歌において、「説明」や「相補」のように本来的な読み方とは異なり、表記に表現意図がある「表現としての二重表記」より、複数の読みを持つ単漢字や熟字の読み方の「限定」と和語の英訳を示す「翻訳」、つまり「読みとしての二重表記」が最も多く使用されることが指摘されている。表1からわかるように、本調査で収集した二重表記のうち、最も多く使用されている用法は「説明」であり、該当する用例は全体のうち57.39%を占めている。また、「表現としての二重表記」として「言い換え」や「相補」を加えると全体のうち80%ほどを占めており、「限定」や「翻訳」より大幅に使用されていることが確認された。このことから、J-POPの歌詞においては、「読みとしての二重表

記」より「表現としての二重表記」が多く使用されていることが推測される。

表 1 二重表記の用法数と割合

大分類	用法分類	延べ例数	出現率(%)	例	先行研究での分類
主副両方が同じ意味を表す	翻訳	30	8.70%	雑誌(マガジン)	「読みとしての二重表記」
	限定	8	2.32%	同(おんな)じ	
	言い換え	54	15.65%	希望(のぞみ)	
主副両方の意味が相似している	代名詞	6	1.74%	自分自身(きみ)	「表現としての二重表記」
	比喻	7	2.03%	傷跡(かこ)	
	説明	198	57.39%	都会(まち), 瞳(め)	
主副両方を合わせて完全な意味を表す	相補	22	6.38%	瞬間(きおく)	
	空耳	15	4.35%	color(殻)	
その他	その他	5	1.45%	戯言(ざれごと)	「読みとしての二重表記」
総計		345	100.00%	-	

また、図 1 で示した分類基準と照らし合わせると、主表記と副表記の「両方が同じ意味を表す」関係にあたる二重表記は、全体のうち約 25%を占めており、そのうち最も多い用法は主表記と副表記が同義語と思われる「言い換え」であることがわかる。一方、「両方の意味が相似している」関係にあたる二重表記は全体の約 60%を占めており、そのうち、最も多く使用されている用法は文脈に依存せず成り立つ「説明」である。残った 10%は「両方を合わせて完全な意味を表す」関係にあたる二重表記である。この結果から、主表記と副表記の両方が表そうとする意味が相似している二重表記が最も多く出現し、そのうち、文脈に依存せず成り立つ「説明」の使用が著しく高いことが確認された。

表 2 は二重表記の用例に該当する分類を年度別に集計した結果である。表 2 から、最も多い「説明」の使用率が 50%~60%の間に安定していることがわかる。2 番目に使用率が高い「言い換え」の使用率は、1999 年と 2004 年では最小値の 10%以下に下がっているが、それら以外の年では 20%ほどを維持している。具体的には、1999 年では「翻訳」が布袋寅泰「バンビーナ」(森雪之丞作詞, 1999)などの 3 曲において使用され、2004 年では「空耳」がタッキー&翼「One Day, One Dream」(小幡英之作詞, 2004)において 15 回も使用されているため、ほかの年と違って、その年における 2 番目に多い用法となっている。

表 2 発売年別の用法数と割合

	1989		1994		1999		2004		2009		2014		2019	
翻訳	1	5%	2	4%	8	15%	2	4%	7	13%	3	6%	7	13%
限定	0	0%	1	2%	0	0%	0	0%	0	0%	5	10%	2	4%
説明	15	68%	29	56%	34	63%	28	49%	32	59%	31	60%	29	54%
言い換え	5	22%	10	19%	4	7%	5	9%	9	17%	9	17%	12	22%
代名詞	0	0%	0	0%	3	6%	0	0%	3	6%	0	0%	0	0%
比喻	1	5%	1	2%	2	4%	1	2%	1	2%	1	2%	0	0%
空耳	0	0%	0	0%	0	0%	15	26%	0	0%	0	0%	0	0%
相補	0	0%	8	15%	3	6%	6	11%	2	4%	3	6%	0	0%
その他	0	0%	1	2%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	4	7%
総計	22	100%	52	100%	54	100%	57	100%	54	100%	52	100%	54	100%

4.2 分類ごとの分析

次に、本研究で収集した二重表記から、具体例を挙げながら分類ごとに分析する。

(1)「翻訳」とは、下記の例 4. のように、主表記と副表記のどちらか一方が外来語あるいはアルファベットで書かれた英語の和訳を示す用法である。本研究のデータから、「翻訳」という用法に該当する用例は 8.70%の出現率で延べ 30 例が観察された。今野(2009), 白勢(2012), 清水(2020)など、小説や現代短歌、漫画などのジャンルにおいて、「翻訳」が「二重表記」の分類項目として扱われている先行研究が多く見られるため、これはジャンルを問わず、二重表記の一般的な用法の一つであると言えるであろう。しかし、歌詞における 8.70%の出現率は他のジャンルと比べてやや低い。

4. ノードになったら天使(エンジェル)の羽根が (布袋寅泰「バンビーナ」, 森雪之丞作詞, 1999)

(2)「限定」とは、主表記の読み方を副表記で限定する用法である。ここで限定している読み方は、普段の生活でめったに使われず、「大辞林」と「常用漢字表」には掲載されていない読み方や、例 5.のように口語、方言にある発音などのことを指す。本調査では 2.32%の出現率で延べ 8 例しか見られないが、先行研究で言及している使用率が 40%近くの現代短歌と比べると、J-POP の歌詞は「読みとしての二重表記」より、「表現としての二重表記」を重視していることが推測される。

5. 同(おんな)じ未来へ (V6「Super Powers」, 森雪之丞作詞, 2019)

(3)「説明」とは主表記と副表記のどちらか一方が、より具体的な意味を持ってもう一方を説明する用法である。「説明」に分けられた例は実際に出現している曲の歌詞の文脈に依存せず、主表記と副表記にあたる語は一般的な使用でも強い結びつきが見られ、常に上下・包摂関係に当てはまるものである。副表記の語が上位語であり、主表記の語がその下位語である例が多く見られ、主表記のほうが副表記の意味より指示する範囲が狭くなり、指向性のより明確でかつ具体的な意味を表す例が多い。「説明」は本調査では最も多く出現しているため、歌詞における二重表記の一般的な用法であると言えるであろう。

ここで、時間の意味を表す表現を例として挙げる。例 6.は、副表記の「トキ」は上位語であり、主表記の「瞬間」が下位語であるため、主表記が副表記より明確でかつ具体的に時間の意味を表そうとしている。また、例 7.のような場合は、例 6.とは逆に、主表記の「時間」が抽象概念であり、副表記の「きせつ」のほうがより具体的な意味を表す。本調査では、主表記が上位語で副表記が下位語である例はこの「時間(きせつ)」,「未来(あした)」(GRaceeN 作詞, 2009 など),「過去(きのう)」(大黒摩季作詞, 1994)の 3 例のみであり、延べ 5 回出現している。他のジャンルでは見られないことから、「説明」という二重表記の用法は J-POP の歌詞において新たなあり方として発達したことがうかがえる。

6. 優しさに触れる瞬間(トキ)が (嵐「マイガール」, Wonderland 作詞, 2009)

7. これからの時間(きせつ) (秋元順子「愛のままで…」, 花岡優平作詞, 2009)

(4)「言い換え」とは、主表記と副表記が同義語である用法である。主表記と副表記である語がそれぞれ違う言葉でありながら同じ事柄を表す。白勢(2012)では、「実家(八王子)」という例を挙げ、「八王子にある実家」のように修飾関係として言い換えが可能であるため、「言い換え表現」に分類しているが、本研究では、文脈を離れても言い換えが成立する二重表記を「言い換え」とする。ここで、「言い換え」とされる基準として、「分類語彙表」を用いる。本研究で収集した例では、主表記が二字漢語のサ変名詞であり、そのペアとなる副表記が同じあるいは近い意味を表す和語の動詞である用例が多く見られた。例えば、例 8.「比較(くらべる)」¹の場合、主表記であるサ変名詞「比較」は「比較する」、副表記は「くらべる」として捉えられ、それぞれ「分類語彙表」における分類番号と段落番号が同じであるため、同義語になる関係とし、「言い換え」の類に分けた。「言い換え」は、本研究のデータにおいて、最も多く見られた「説明」の次に、15.65%の出現率で使用されている。

8. 他人(だれ)かと比較(くら)べる幸せなんていない (秋元順子「愛のままで…」, 花岡優平作詞, 2009)

(5)「代名詞」とは、主表記と副表記のどちらか一方が代名詞を用いてもう一方を指す用法である。本研究のデータでは、「代名詞」に分けられる例は 6 回しか出現していないが、その全てにおいて副表記が代名詞である。また、白勢(2012)によれば、「代名詞」の分類にあたる二重表記は漫画において多く使用されているが、清水(2020)によると、現代短歌においては、漫画と違い、「代名詞」は使用にくいことが指摘されている。よって、「代名詞」にあたる二重表記はジャンルによって使用実態が異なっている可能性が考えられる。本調査から、

¹ 歌詞本文では「比較(くら)べる」,「鎖(つ)ないで」のような例は、分析する際には、主表記は「比較」,「鎖」とし、副表記は「くらべる」,「つないで」とする。

J-POP の歌詞において、「代名詞」としての二重表記の使用はまれであることがうかがえる。

9. 心(ここ)にいるから逢いたい (ゆず「逢いたい」, 北川悠仁作詞, 2009)

(6)「比喩」とは、主表記と副表記のどちらか一方がイメージしやすいものになぞらえてもう一方を表現するという比喩の修辞法を用いた用法である。一般的に、直喩や隠喩、提喩などに分けられるが、歌詞における二重表記の用法として、「～のような～」の形で表現できる直喩と、「ようだ」などの比況助動詞を使わず、喩えられるものをイメージできるように表現する隠喩の2つが観察された。例 10.の「傷跡(かこ)」という二重表記は「過去は傷跡だ」という意味で解釈できると考えられるため、隠喩として「比喩」に分類した。同様に、例 11.の「鎖(つないで)」という二重表記は「鎖で閉ざすようにつないでいる」という解釈が考えられるため、直喩として「比喩」の類に分類した。「比喩」は本研究のデータでは、延べ7例が見られた。

10. 小さな傷跡(かこ)にさよなら (TUBE「夏を抱きしめて」, 前田亘輝作詞, 1994)

11. その瞳(め)で鎖(つ)ないで (ポケットビスケッツ「Days」, CHIAKI・ポケットビスケッツ作詞, 1999)

(7)「空耳」とは、空耳を用いて二重の意味を表す用法である。ここで、「空耳」という言葉は「本物の歌詞ではなく、偽の歌詞をつけて、それがあたかも本当のように聞こえること」を指す。たとえば、例 12.のように、主表記の「color」という歌詞が、副表記の「殻」のように聞こえ、「自分の殻を破って、自分の color=色を塗り替える」という二重の意味を表現していると考えられる。

「空耳」という言葉は元々幻聴を意味しているが、テレビ朝日の番組「タモリ倶楽部」の「空耳アワー」という1992年に開始したコーナーから、転じた「空耳」の意味も広く知られるようになった。現在では外国語歌詞を母語において類似して発音されたもののよう聞こえる現象として扱われている(羽鹿他, 2018)。本調査では、「空耳」に該当するすべての例は、主表記が英語であり、副表記が日本語あるいは「日本語+英語」の形であるが、それらはタッキー&翼「One Day, One Dream」の一曲の中で延べ15回出現している。また、例 13.のように、二重表記が複数の単語からなる文節である例はこの用法のみで見られた。これは限られた楽曲に集中的に使われているが、他のジャンルでは見られない用法であるため、J-POP の歌詞における二重表記の特有な用法であると言える。

12. 自分の color(殻)破って (タッキー&翼「One Day, One Dream」, 小幡英之作詞, 2004)

13. I'm in a world (曖昧な world) 駆け抜けよう (タッキー&翼「One Day, One Dream」, 小幡英之作詞, 2004)

(8)「相補」とは、主表記と副表記のどちらか一方が修飾語であり、相互に表現を補い合う用法である。「空耳」と同様に、主表記と副表記の両方を合わせて二重表記の完全なる意味を表現できる。例 14.のように、「純真(おもい)」という二重表記は「純真な思い」という意味を表現すると考えられる。管見の限り、清水(2020)以外は、「相補」に言及している先行研究はほとんどない。ただ、本研究における「相補」の用例は、白勢(2012)の分類によれば、「言い換え」として捉えられる。また、清水(2020)で挙げている「啓発本(ベストセーラ)」の例のように、「相補」にあたる二重表記の品詞構成は基本的に「名詞(名詞)」である。本調査では、「相補」に分けられる用例が延べ22回観察され、「名詞(名詞)」の構造を持つ用例以外に、「純粋(ほんき)」(大黒摩季作詞, 1994)や下記の例 14.「純真(おもい)」のように、ナ形容詞としても用いられる名詞の二重表記の用例も観察された。

14. 愛しすぎて誰にも言えないこの純真(おもい)が (三代目 J SOUL BROTHERS from EXILE TRIBE「C.O.S.M.O.S. ～秋桜～」, Masato Odake 作詞, 2019)

(9)「その他」には、例 15.のように副表記である語の送り仮名が脱落したり、主表記である語が副表記の旧体字を示したりする用法を分類した。本研究のデータにおいて延べ5回出現しているが、他のジャンルにおいては見られない用法であり、前述の8つの用法のいずれにも明確に分けられないため、「その他」として扱う。

15. 愛(いとお)しくもあるこの頃では (Mr. Children 「innocent world」, 桜井和寿作詞, 1994)

5. おわりに

本研究では、1989 年～2019 年の約 30 年間の J-POP において、歌詞における二重表記の 9 つの用法を考察し、分類の確認をした。結論として、以下 3 点が挙げられる。

まず、二重表記の一般的用法とされる「翻訳」、「限定」などの用法は、J-POP の歌詞において他のジャンルと比べると少ない。本研究で定めた二重表記の定義にも関係していると思われるが、これらの用法は単に読みを提示する機能を果たし、表現力がやや乏しいのではないかと考えられるため、表現を重視する歌詞における使用率が低いと推測される。

次に、文脈に依存せず成り立つ「説明」の使用は著しく高い。また、「時間(きせつ)」のように主表記が抽象的概念であり、副表記のほうがより具体的な意味を表す二重表記の新たな機能が観察された。

最後に、「空耳」は J-POP の歌詞で特有な二重表記の用法として新たに観察されたが、特定の曲に集中的に使用されていた。

本研究では、J-POP 歌詞における二重表記の用法を考察したが、今後の課題も多く残されている。「説明」や「言い換え」などの用法について、本調査で収集した例を具体的に見ると、主表記と副表記それぞれにあたるものが類義語である用例が多く出現し、主表記と副表記の間に強い結びつきが見られる傾向が観察された。そのような類義語のうち、どのようなものが歌詞における二重表記として使用される可能性が高いかを考察する余地がある。例えば、「瞳(め)」、「都会(まち)」の場合、主表記が「眸」や「都市」ではない理由は何であろうか。また、書き言葉や話し言葉でもない「歌い言葉」としての歌詞において、二重表記が使用される要因や J-POP と演歌における相違など、さらに検討する必要があると考えられる。

参考文献

- 石黒圭(2005)「ルビと複線的テキスト」『よくわかる文章表現の技術III 文法編』,pp.238-254,明治書院
泉文明(1993)「二重表記の現在—短歌・俳句の表記の調査—」『日本語学』12(3),pp.95-104,明治書院
伊藤雅光(2017)『J ポップの日本語研究—創作型人工知能のために—』朝倉書店
岩淵匡(1988)「振り仮名の役割」『日本語の文字・表記(下)』(講座日本語と日本語教育 9), pp.58-86,明治書院
鳥賀陽弘道(2005)『J ポップとは何か:巨大化する音楽産業』岩波書店
今野真二(2009)『振仮名の歴史』,pp.14-25,集英社
佐竹秀雄(1980)「表記行動のモデルと表記意識」『電子計算機による国語研究』(10), 142-168, 国立国語研究所
清水恵理(2020)「現代短歌における二重表記の役割:日本語学的見地から」『さいたま言語研究』(4):38-51
白勢彩子(2012)「当て字の現代用法について」『東京学芸大学紀要人文社会科学系』(63),pp.103-108
鈴木直枝・山口孝志(2000)「流行歌の歌詞にみる言語の変遷—過去 34 年間のヒットソングを通して」東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部『紀要』(31),pp.55-65
羽鹿諒・山西良典・ジェレミー ホワイト(2018)「空耳フレーズを用いた外国語発音教育に向けた一検討」『情報処理学会論文誌』59(1), 246-255
山田敏弘(2018)「いきものがかりの言語学 6:当て字」『岐阜大学教育学部研究報告.人文科学』(67)-1,pp.11-20

関連 URL

- オリコンミュージックストア配信サービス『オリコン年間 CD シングルランキング』
<https://music.oricon.co.jp/php/special/Special.php?pcd=yrankindex>
歌詞検索サービス『歌ネット』<https://www.uta-net.com/>
国立国語研究所コーパス開発センター『分類語彙表—増補改訂版データベース』
<https://ccd.ninjal.ac.jp/goihyo.html>
三省堂『スーパー大辞林 3.0』<https://www.sanseido-publ.co.jp/publ/ep/web/wm01.html>
『ニコニコ大百科』における「空耳」の定義について <https://dic.nicovideo.jp/a/%E7%A9%BA%E8%80%B3>
文化庁『常用漢字表』(平成 22 年内閣告示第 2 号)
https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/kanji/